「鳩ヶ峰碑」について

整理番号	題額	題額揮毫	碑記撰文	碑記揮毫
石川〇一	鳩ヶ峰	重野安繹	天保山人	松濤野人

鐫刻	撰文建碑年	住所	場所	備考
—	一九〇〇・明治三三	七尾市小島町	唐崎神社	

一．はじめに

本石碑は、七尾の有力者であった池田富次郎、醜名鳩ヶ峰について、その功績をたたえた寿蔵碑である。石碑本体は、正面に題額が大書されるのみで、右の脇に立つ台座に、池田の経歴や立碑の経緯などが漢文で記されている。左側の台座にも文字が見えるが、判読できない。また石碑を囲んで、石柱が何本か立つが、発起人などの名が記されている。石碑に彫られている三種の落款は、揮毫者重野安繹のものだろうが、判読できなかった。

〇写真１　石碑正面

○写真２　揮毫者の書き込み（左側）

○写真３　揮毫者の書き込み（右側）

○写真４　石碑背面と台座

○写真５　台座に彫られた碑文

二．翻刻並に訳注

■翻刻

（石碑正面）

◎題額

癸巳歳九月書贈

落款

鳩ケ峰

従四位文學博士　重野安繹　落款　落款

（台座）

◎碑記

鳩ヶ峰富次郎者七尾人也
姓池田氏自少小好角觝鬪
技於各地有年矣明治十年
為相撲頭取二十二季被七
尾町會議員選尋辞之當七
尾町始置消防組爲用度係
夛所竭力三十一年為消防
組頭性任俠或損貲恤貧民
或獻建學之費為受褒賞數
次今茲有志者數十人胥議
欲建壽碑来請予文盖有慕
於其義俠之風者也富次郎
年齒五十有八將益有所努
云
明治三十三年五月
天保山人撰
松濤野人書

＊異体字等

○歳　歳。　○於　於。　○年　年。　○辞　辭。　○夛　多。　○所　所。

○或　或。　○盖　蓋。　○所　所。

■**訳注**

●**本文**（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

◎**題額**

癸巳歳九月、書贈。
鳩ヶ峰
從四位文學博士、重野安繹。

◎**碑記**

鳩ヶ峰富次郎者、七尾人也。
姓池田氏。
自少小、好角觝、鬪技於各地、有年矣。
明治十年、爲相撲頭取。
二十二季、被七尾町會議員選。
尋辭之。
當七尾町始置消防組、爲用度係。
多所竭力。
三十一年、爲消防組頭。
性任俠、或損貲、恤貧民、或獻建學之費。
爲受褒賞數次。
今茲、有志者數十人、胥議、欲建壽碑、來請予文。
蓋有慕於其義俠之風者也。
富次郎年齒五十有八。
將益有所努云。
明治三十三年五月、
天保山人撰。
松濤野人書。

●**訓訳**

◎**題額**

癸巳の歳九月、書し贈る。
鳩ヶ峰
從四位文學博士、重野安繹。

◎**碑記**

鳩ヶ峰富次郎は、七尾の人なり。
姓は池田氏なり。
少小より、角觝を好み、技を各地に鬪はすこと、有年なり。
明治十年、相撲頭取となる。
二十二季、七尾町會議員に選せらる。

尋いで之を辭す。
七尾町　始めて消防組を置くに當り、用度係となる。
力を竭すところ多し。
三十一年、消防組頭となる。
性　任俠にして、或いは貲を捐(す)てて貧民を恤(あはれ)み、或いは建學の費を獻ず。
ために褒賞を受くること數次なり。
今茲に、志を有する者數十人、胥(とも)に議し、壽碑を建てんと欲し、來りて予に文を請ふ。
蓋し其の義俠の風を慕ふ者有るなり。
富次郎、年齒五十有八なり。
將に益々努むるところ有らんとすと云ふ。
明治三十三年五月、
天保山人　撰す。
松濤野人　書す。

●人物

○池田富次郎　碑を立てた明治三十三年に五十八歳であったというので、生年は天保十四（一八四三）年。「七尾の石碑」によれば、家業は代々女郎屋であったという。ウエブサイト「こみみ情報局　街かどニュース」（二〇二一・七・七）には、「常磐町にあった妓楼池田屋（通称ハンコ屋）」だという。『全国遊廓案内』（昭和五年）には「七尾町遊郭は　妓楼は二十八軒」とある。鳩ヶ峰は、池田富次郎の四股名。
○重野安繹　文政十（一八二七）年から明治四十三（一九〇一）年。鹿児島藩士の生まれ。嘉永元（一八四八）年、江戸の昌平黌の生徒となり、塩谷宕陰・安井息軒などに学ぶ。維新後は学問世界に進み、『大日本編年史』編纂に参加するなど修史事業にたずさわり、実証主義的な歴史学を唱道した。学士院会員となり、帝国大学教授などを歴任。著書に、『成斎文初集』『重野博士史学論文集』などがある。この碑文を撰述したのは、六十六歳の時。
○天保山人　不詳であるが、和倉温泉の宣伝を目的とした「美湾雑誌」なるものが刊行された。田治八十八を著作兼発行者とし、天保山書庫を発行所とする。第一号が明治三十八（一九〇五）年八月の発行で、表紙の「美湾雑誌」の題を書いたのが天保山人。また雑誌中に「山荘独居」と題する七言絶句が収録されおり、その作者も天保山人とある。第一号の挨拶文を多田館の多田吉松と、和歌崎旅館の和歌崎六五郎が書いている。明治後半ごろの、和倉温泉をめぐる有力者や文人の一人であったのだろう。
○松濤野人　不詳。

●注

○癸巳歳　明治二十六（一八九三）年。台座に記す石碑の建立に先立つこと、七年である。この段階で寿蔵碑建設の話があり、重野に揮毫を依頼して、書が完成していた。それから建碑に至るまで七年ほど経過したのだろうか。
○書贈　重野が「鳩ヶ峰」の書を揮毫して贈ったということか。
○少小　年齢が若いさま、またその人。ここでは年若いころ、くらいだろう。
○角觝　角は競う、觝は当たること。角觝は、武芸や技術を競い合うこと、またその競技。日本では、相撲を指すことが多い。

○有年　多年、何年もの間。
○明治十年　西暦一八七七年、富次郎三十五歳。
○相撲頭取　不詳だが、七尾の相撲関係の組織の長だろう。
○二十二季　季は、日本語で、年。明治二十二年は、西暦一八八九年で、富次郎四十七歳。
○尋　まもなく。
○七尾町始置消防組　消防組は、戦前の日本において消防活動を行った非常備の消防機関で、現在の消防団に相当する。明治二十七（一八九四）年に、「消防組規則」が定められ、全国的に統一の組織となった。七尾町での創設は、あるいはこの時かもしれない。そうであれば、富次郎五十二歳となる。なお、消防組員の階級は「組頭・小頭・消防士」で、費用は市町村が負担した。
○用度係　用度はまた用途。日本語で、要する費用、あるいは必要な物資。それを担当する係で、今でいう、会計係か、物資調達係ではないか。
○三十一年　明治三十一年は西暦一八九八年で、富次郎五十六歳。
○消防組頭　前注。消防組の長。
○任侠　男の面目を立てとおし、真義を重んじること。弱きを助け強きをくじき、義のためには命も惜しまないといった男らしい気性に富むこと。
○或　あるときは。
○損貲　損は捨てる、貲は財産。私財をなげうつこと。
○恤　あわれむと読むが、心情として同情するだけではなく経済的に救済することを伴う。
○建學　学校建設。
○壽碑　その人の死後ではなく、生前に功績をたたえて立てる碑。寿蔵碑ともいう。
○義俠　任侠に同じ。正義のために強者を押さえ、弱者を助けること。男気。
○年齒　年齢。数え年。
○明治三十三年　西暦一九〇〇年。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

◎題額

癸巳の歳九月、揮毫して贈呈する。
鳩ヶ峯
従四位文學博士の重野安繹。

◎碑記

【鳩ヶ峰の出自】
鳩ヶ峰富次郎は、七尾の人である。
姓は池田氏である。
【若いころの相撲修行】
年若いころから、相撲を好み、何年もの間、各地を巡って技を闘わせてきた。
【七尾での経歴と功績】
明治十年、三十五歳で、相撲頭取となる。
同二十二年、四十七歳で、七尾町会議員に選抜された。
しかし、まもなく辞任した。

七尾町が消防組を始めて作ったとき（明治二十七年、五十二歳）、用度係を担当した。力を尽くすことが多かった。

同三十一年、五十六歳で、消防組頭となる。

【富次郎の男気ぶり】

富次郎君は、弱きを助け強きをくじく男気のある人柄だ。あるときは私財を投じて貧民を救済し、あるときは学校建設の費用を献上した。

これらの善行により、何度も褒賞を受けた。

【建碑の企てと碑文の依頼】

いまここに、志を同じくする数十人がともに話し合い、富次郎君のために寿蔵碑を立てることを企て、私の所へ碑文の撰文を依頼に来た。

思うに、富次郎君の義侠心あふれる風体を慕うものたちなのだろう。

【富次郎の今】

富次郎君は、現在五十八歳である。

これから益々努力することがあるだろうということだ。

【記事】

明治三十三年五月、天保山人が撰文した。松涛野人が書した。

三．主な参考資料

①紹介

・七尾の碑編集委員会『七尾の碑』七尾市立図書館友の会編、一九九九。

②参考文献等

・『全國遊廓案内』（日本遊覧社、一九三〇）『近代庶民生活誌』第十四巻所収。

・「鳩ヶ峰の石碑！？」「こみみ情報局　街かどニュース」（二〇二一・七・七）

＊本稿作成にあたり、石川県立図書館・七尾市立図書館・こみみ情報局より情報の提供を受けた。ここに記して御礼としたい。

以上

二〇二四年十二月　薄井俊二訳す